

● 竜山石（宝殿石）概説 学名 流紋岩質溶結凝灰岩の解説

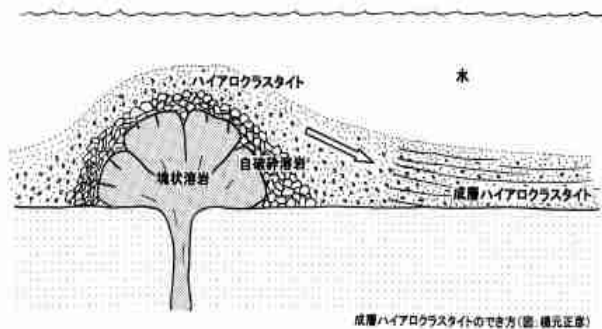
兵庫県の加古川下流右岸に産する流紋岩質溶結凝灰岩の石材の呼称で、白亜紀後期（約 7000 万年前）の火山活動によって噴出した火砕流堆積物が厚く堆積したもの。

古墳時代、畿内の大王や豪族などの石棺にも数多く使われており、7 世紀頃に造られたと考えられる“石の宝殿”は宝殿山の中腹にある約 500 トンの浮石で、生石神社の祭神として祭られ、江戸時代の末、シーボルトも訪れヨーロッパに紹介されている。古墳時代中期には、畿内の権力者のほとんどの石棺にこの竜山石が使われ、「大王の石」と称されました。

古墳時代中期の石棺はほとんどが 6 枚の板石を組み合わせてつくられた「長持形石棺」。

古墳時代後期には、この石から「家形石棺」がつけられた。この頃は、地方の豪族や有力者の墓にも数多く利用された。鎌倉～室町時代には、五輪塔や宝篋印塔など、江戸時代の初期には姫路城の石垣などにも利用された。

明治以降には、旧造幣局鑄造所(1870 年)や住友銀行本店ビル(1922 年)、京都ホテル旧館(1928 年)など、近代建築物などの壁材として利用された。竜山石の採掘は今も続けられ、河川や公園などの石垣、モニュメントや花壇の縁取り石など、建築用や造園用に広く利用されている。



高砂市ホームページより

竜山石 補足 インターネット検索整理

この竜山石には 3 つの色がある。

「青竜石」、もっとも変質の程度が低いもの

「黄竜石」、風化によって基質に微細な水酸化鉄が広がったもの

「赤竜石」 岩石の固結末期に節理に沿って上昇したマグマ残液の熱水によって熱せられ白雲母や方解石ができてその周りに酸化鉄ができたもの



加古川東高校地学部が日本地質学会 2008 秋田大会「小さな Earth Scientist の集い」優秀賞受賞研究より

竜山や伊保山の石切場の崖は、竜山石の大きな露頭。少し離れてこの崖を見ると、淡緑色の層の間に、濃緑色の層が数 cm の厚さで平行にはさまれる縞模様が平行に入っている。淡緑色の部分には、数 cm～数 mm の大きさの白い流紋岩の岩片が多く入っており、濃緑色の部分には、この流紋岩の岩片がほとんど含まれておらず、長石の結晶片が白く点々と含まれている。

竜山石には柱状節理がほとんど見られないことから、水中で形成されたものと考えられている。(カルデラ湖の中で再度火山活動がおり、火砕流が発生)

淡緑色の基質の中に、それより少し濃い緑色の流紋岩の岩片が点在。この流紋岩の岩片は、不規則な外形をしたものとフレーク状のものがある(最大 15mm)。

流紋岩の岩片と基質との境界はシャープですが、岩片の外形は複雑に入り組んでいます。流紋岩の岩片はガラス質で、流理構造を示すものも見られます。また、石英と斜長石の斑晶を少量含んでいます。岩片は雑然と散在していますが、フレーク状のものは平行に並ぶ傾向があります。流紋岩以外に、軽石や黒色の泥岩を岩片として少量含んでいます。基質は、細粒で緻密、石英と黄褐色に色ついた斜長石の結晶片を含んでいます。



石切場の風景



石切場に見られる成層構造



竜山石の研磨面(写真横 7 cm)



青竜石(横 10.5cm)



黄竜石(横 11.5cm)